

ミルカやの老

法悦の巻

法喜禪悦……………	一
起信論……………	八
本願力……………	一三
衆生の方より……………	一五
信愛欲……………	一六
光……………	一八
光明は如来摂化の靈力……………	一九
光化の人格これ証明……………	二二
有余無余無住所涅槃……………	二四
大光明中の生活……………	二九

法喜禪悦

聖典に如来の光明は遍ねく十方の世界を照して念佛の衆生を攝取して捨給はずと。

意は如来の光明は普遍に照し巨れども殊に如来を念ずる人に御心が感應融合して攝受し下さると云ふことである。善導大師は此意を衆生行を起して口に佛を稱ふれば佛即ち之を聞き給ひ、身に禮敬すれば佛即ち之を見給ふ。心常に佛を念ずれば佛即ち之を知り給ふ。衆生佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念し給ふ。彼此の三業相捨離せず故に親縁と名づく。斯心を圖に表はしたので、如来は私共の大御親にて私共は其の子である。親と子との心の融合

して、而して如来の強き力にて私共の靈を育て、靈化して下さるのである。

さて大御親は常に衆生を救ひ下さる慈悲の光あるならば何故に私共に分らぬので有らうと云ふ疑が起る。そは肉體でも赤子が初の程は、母親の容が見えぬのであるが漸に形體が發育に随つて母の容を見て悦ぶやうなもので、又私共の肉體も初母の乳にて養はれて成長すると同じく心靈も矢張り同じ形式に、信仰心が育つて行くのである。然らば何にして信仰心が出来、また増長で有らうそは赤子が初めて、産聲を揚げた時には母の容は見えぬども、啼く音を便りに母の方から乳房を含ましてくれる乳を呑むから次第に成長する。私共の心靈も、光明名號の眞理を聞き、如来は全く私の靈の御親であると確かと自覺した時は、恰ど靈の子が生れたので、眞から稱名の聲が發する様に爲つたのが心靈の産聲である。名は稱ふれ、また如来の慈悲の御顔は拜めぬけれども、稱名の聲する處に大御親の靈の乳は與へて下さるのである。念佛心に心光の乳は感受するので、それが靈を養ふのである。如来を念じて止まざる時は、心靈が益々發達して慈悲の温容を拜めるやうになれる。またく常に御慈悲の懷の中に安住しつゝ、ある身であると想はるゝ。

如来の恩籠に信仰心も育てられ何時も懐しい親様と、寢ても寤

四
ても、共に在つて離れぬ様に想はれる。然すると此の弱き私共の心の生活に、いかに力を得るか量られませぬ。而して肉體も命もある限りは、日々の食糧なくては應はぬ如く、心靈の信仰の命も靈の食物がなくてはなりませぬ。一心に念佛して如來の恩寵を被むる、然すると靈感をえて常に靈が養はるゝのである。心靈の法味即ち信仰心に感受る糧に二種に分つて見ると、一は法喜と云ひ、一を禪悦と云ふ。

法喜を得れば何いふ感じがするとならば、眞に信心が成熟して靈が開發したる上には、從來とは心機一轉して靈の曉となり。夫からは氣分は快廓浩蕩して天地も一變した様に思はれ、溫暖なる和氣に、麗はしく櫻花の笑める如く、靈氣の卓めたる中に、心の花開きて、常磐の春の長閑なる氣分となるを法喜と云ふ。次に禪悦と云ふのはまた三昧樂とも曰ふ。此は一心に念佛して、無我の境に入ると、如來の恩寵と自我とが神秘的に融合する。この時の得も云はれぬ悅樂を感じる時の靈味である。法喜も禪悦と同じく宗教心に感じ得らるゝ妙味で、神を養ひ、心を快活にし、また心廣く體肝かにならしむる感情上の興感である。

生命のある活ける信仰は、斯る微妙の味ひを以て養はるゝが故に、活動の原動力とも成るのである。世の人、肉體には和洋の料理に美を味ひ、口腹を恣にするも、心靈に極りなき靈味を感じる

五

六
なき爲に終身肉の奴隷たることを免れぬ者が多いのである。斯かる妙味を以て、心靈を養ひ、靈的生活に入るは、いかに幸福でありませう。實に斯様な生活に入るに非ざれば、眞に人間の身を受けし甲斐はないと私共は信じます。

諸彦よ。自己の心靈が、如何なる聖きを以て養はれつゝあるかを省み給へ。實に日に三度の食よりは尙尊き、靈の糧を求めて心靈を養ひ、清き生命となり、今此の現世を通じて永遠の生命を保ち、清き御國の人とならんことを御勸め申します。

大乘起信論

歸命盡十方、最勝業、徧知色無礙自在、救世大患者、及彼身體相、法性眞如海、無量功德藏、如實修行等。

七

起信論

筆記 (5)

八

「大は一心當體——個人心の根底

法、一心、體、相、用 ○個人心より本體を通じて當體とす。



一大觀念體

義、三、相と用との屬性を有する體

「乘は此理に乗じて終局に歸す。即ち眞如と一致して成佛する。

大乘は客體所信の境、起信は主體能信の心。

淨土宗は佛本尊、聖道門は多く法本尊。理を信する起信論も一方

は理を信する信仰の目當は理である。

「起は喚起覺醒——大乘の理を聞いて始めて覺醒する。

本覺（理性）内薫を因とし、善友外薫を縁とす。（人は素質あるけれ

ども皆別々なり。本覺から云へば、人間も畜生も同じく動物なり、

然れども畜生は素質なし。同じく法を聽聞して素質の能く出來て居

る人は早くに覺醒する。機根マチ（なり）。

此理に就いて心を淨からしむるを信と云ふ。



理性のゆるすこと
相違なしと信する

「論者自分に信じて書し亦後輩の爲に説く。

歸命

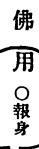
能歸

九

一〇



全心全幅を絶對依屬す

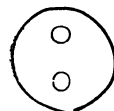


衆生を救濟する能を有するもの悲智法界周遍自在無
碍者

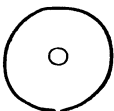
生きて在す最勝佛

生の爲に代表する佛

佛、法、體、用、三身と分ぐれば上の如し



相待依屬



絶待依屬

彼此相對は相待的歸依

業は三輪

遍知に二、眞智——知心眞如門、
俗智——知心生滅門

無碍

一、大小無碍——一、一、根遍法界、不壞諸根性（五根の性を破らす）

二、互用無碍——諸根の無碍

三、事理無碍——事相の色身炳然として舉體性空眞如の表政に事

理無碍

四、應機無碍——回週の身故に十方齊現、機頓に感す

一一

十方衆生齊しく應ずる譬へば天の一月影萬水に浮ぶが如し
大悲とは無縁の慈なり

如來の智慧及一切妙用法界に周遍す

彼身とは法體なり法體一なれども衆生に對する活の爲に二身を現
す
體は眞如、體相は四智等

此體は獨り佛の體なるのみに非らず染淨情無情の一切法の體たり。
法體を離れて此身有ることなし。

如實修行者とは先輩として敬ふなり。先輩の導に依つて佛に歸す
るなり。元祖上人は應身の釋迦如來、釋尊は報身の如來の導に依る。
本を云はゞ三身一體なれども(一)に依つては斯様に先輩に依る。

本願力

本願力とは先づ本願の意は大ミオヤが一切の子に對する願望で
ある。世間にも親が子に對する望みは子をして親自己と同一の位
置に到らしめんとする。而して自己の志を繼がしめ第二の自己た
らしめんとするにあり。大ミオヤも亦然り一切衆生をして成佛せ
しめて圓滿至善ならしむるにあり。

力とは如來の一大靈力が一切の子等を解脱靈化せしめ圓滿に養
ふ力なり。此の力法界に周遍す。此の力太陽が光化熱の三線を以
て地上の萬物に及ぼすが如く智慧と慈悲と靈化の三能を以て衆生

界の心靈を開悟與樂靈化するの能あり。如來の一大能力を以て萬
物に及ぼすに二面あり。一方には大靈より萬物を發現能生養育す
る力となる是れ天地萬物に及ぼす能力である。他面には天則秩序
の下に一切生物を進化せしめて人類の精神生活となる時は心靈を
開發解脱して靈界なる涅槃に攝する靈力あり。

本願力とは自然界の生物を靈界に攝取る力を本願力といふ。
大靈は右の手を以て蔭く種を左の手を以て攝取るなり天則秩
序の中に因果の法則となりて萬物を能生能養するは其の目的は高
等なる靈的生命として永遠に歸趣せしむるを目的とす。目的が即
ち本願力なり。

其の本願を示す爲めに往昔法藏比丘と顯れ十劫正覺と現じまた
三世諸佛となりて世に出現す。歸する處は大靈の目的なる本願力
の出現に外ならず。

衆生の方より

如來本願力は常恒に十方に徧在す。然るに衆生如何にして此の
靈的光明に攝取せらるべき。是れ衆生心が如來の本願力に契合し
て攝取同化する也。是ぞ大ミオヤが法藏と示現して本願四十八の
中十方衆生至心信樂欲生の三心なり。



此の三心は如來の大靈力の目的の靈力と契合する心能なり。
至心は形式にして信樂欲は内容動機なり能く研究すべし。

信愛欲

至心に深く信す。

(心靈的歸命信順)

如來の外に我心靈を攝取し給ふものなし。(イノチトタマシイト
アマカセ奉ル)

如來は生命のミオヤ

心靈のミオヤ

救のミオヤなりと信じ奉る

至心に深く愛す

(心靈的愛樂)

如來の外に心靈を愛護養育し玉ふもの有ることなし。故にすべ
てのものに超へて如來の大なる聖寵を愛樂し奉る。

至心に深く欲望す

(心靈的欲望)

聖きみ國は眞善美の至極の處、聖き處に於てミオヤの世つぎた
らんことを欲望し奉る。

光

聖なる斯光明我等が無明を攪きさまして眞理をさとらしむ。斯
光宇宙秘密の奥室を啓示す。斯光生死の中に涅槃を與へ煩惱を轉
じて菩提を成す。凡夫をうつして聖者となす。斯光われらのなや
みの中に慰安を與へ。罪惡を變じて正善とす。斯光心靈世界の太
陽なり。斯光を肉身に滿しめて釋迦牟尼と現はれ、キリストと現
はる。月球は太陽の光によりて明し。若人斯光によりて心靈を曜
かすときは即ち聖者なり。斯光を知らざる故に生死開黒の中にさ
まよふ。

光明は如來攝化の靈力

如來の光明とは何なる相にてまた何なる働きを有ておる哉を説
明せば光明に色光と心光との二種あり色光とは目光また電光の如
くに肉眼にて見べきもの、心光とは心を照す即ち道理を明かにす
る光明である。光明と云ふは實は人の信仰に對する如來の方より
與へ玉へる靈力のことにて宗教にては如來と衆生との關係を親と
子に例し如來の親より衆生と云子に對する作用を恩寵と云ひ親の

恩寵を眞に受ける人の心を信仰と云ふ。故に恩寵と信仰とは親から子に對する聖意と子より親に對する心との双方の間に成立つ作用を云ふ。

華嚴經に譬を以て喩ば天に日光あり人に眼目ありて能く物を視べきが如く縱令如何に明眼あるも日光なくば見ることを得ず、またいかに日光明かに照らすとも眼目なき時は見ることを能はざる如く如來の光明は永しへに照らし玉ふとも人に信心の眼なくては知見することできぬ。されば往生論註にも若し如來の光明は無礎に照らすものなれば何故に世間多くの人が見る事ができぬぞ。との間にそは日光は照し居るも盲者は見ることを能はざる如くに信心の眼なきが故に如來の光明を知見することはできぬなりと答てある。今光明と云事は私共の一心に念佛して信心を凝す時にミオヤの方より興へ玉はる不可思議の靈力であるまた恩寵とも稱へて實に如來は光明を以て一切衆生を攝化し玉ふこと太陽の光明を以て世界のすべての生物を活かす作用の如くに如來の光明は人々の心靈を靈活せしめ玉ふ能力である。其光明の存在に就ては實には理窟よりは實行によりて實感し得らるゝのである故に何人も其光明の眞理を聴きし上には一心に念佛して實地修行する時は信心萌發する時は實驗上自己の精神の實感として何とも云はれぬ氣分となる。

光化の人格これ證明

如來の光明は日光の如くに肉眼で見ることができぬ。其存在をいかにして證明できやうとなれば今例を以て示さん、例へば太陽の光熱化に稻實を成熟すべき力能ある哉否やは目には見へぬ。然れども稻實は全く太陽の力の能力に依て成熟することは疑ふべからず。此には田土に種子を播下し水を灌ぐなどして一方には太陽の熱や化合線の力を被むるが故に稻實は成熟する故に成熟せんとする時期の天候は非常に稻實の成績に影響を及ぼす。是を以て太陽の光に稻實を成熟せしむる力の有ることを證せらるべし。此に例して如來の光明が人の精神を靈化するの光明は肉眼では見ることも能はざるも彌陀の光明威神の功德を聞きて其信根を培ひ一心に念佛する處に如來の不可思議の光明は其人の心靈に加はらん。人の本心は佛性の心田地あり如來光明の眞理を開蕪して之が其人の信心の種子と成つて念々佛を念する時は信心萌發して愈々信根を増長せしめて信念益々増進する時は信心華開き花の如き感情及び情操の麗はしき人格は其内容に於ける信念の豊富なる處より現はる。

次に信念の益々堅實になり人格の核たる情操意志が全く靈化して最も道德と鞏固なる人格の神聖侵すべからざる如きに至るは是

全く彌陀の光明に靈化せられたる最も信心の成熟したる結果である。例へば稻が始め暖温なる和氣を受けて初めて萌發し次に苗として増長し花開きつゝに實を結ぶ如くは彌陀の光明に靈化したる人格を以て彌陀の實在を證明することを得べし。聖善導、聖法然の如き最も圓滿なる靈的人格は全く彌陀の光明に靈化せられたる證なり。實は他の例證を引くに及ばず人々自から一心に念佛して彌陀の大光明に靈化せらるゝ時は自己の人格に結びたる核に於て證明せらるべし。

有餘、無餘、無住所涅槃

佛教の宗教的精神生活即ち信仰の行程として人の精神生活に於て人が生れたるまゝの精神には自然に佛性と煩惱（本心と氣質）との二性ありて具有す。此精神が一は開發すべきもので二は靈化すべきものである。人は如何に天資聰明なるも其資質いかに豊富なるも質のまゝにては宗教心は活動的ならず。人の精神には必ず解脱し靈化せねばならぬ垢質が具有しておる之を佛教には通じて煩惱と云ふ。此煩惱なる惡質は自然に脱却すべきものにあらずして必ず之を脱却すべき契機を要す此れ宗教の必要なる所以である。若し人が宗教なくとも自然に解脱し靈化するべきものならんか宗教要なきにいたる。若しまた宗教の教化を被むりても解脱し靈

化すべき性能なきものなれば宗教なきに至る。

佛教、釋尊の宗教目的は那邊に在かと云はゞ人は本來質のまゝでは本心の靈性も發揮せず煩惱の惡質も脱却せず此のまゝではいかぬ。釋尊は自ら太子の時代に宮中に在て人生問題に煩悶したる自己の胸中には無明なる不靈福なる垢質具有するが爲に精神生活が靈明でなかつた。然して後に入山學道の後に無上正覺を證得なされた當時從來の無明罪惡の人間の心が滅殺して靈なる光明を獲正覺を成して生死の凡夫が永生の靈と生れ更りなされた。之に於て精神的に心機一轉して生れ更つた此精神状態は實に無明の闇夜より正覺の旭出で新たに生れ人格が一變しなされた。從來は人間の肉に生れたるもの生死の凡夫なりしが永生の聖者と更り此に至て見れば肉體の上には異つたことなけれども精神上に大革新したる之を有餘涅槃と云ふ。有餘とは餘依として此依身を指なり。此依身は替らざれども精神が更まりて。精神更まり來つて觀れば宇宙全體がまた新たに白日青天、從來の娑婆の閻宅に在りし人が蓮花藏界光明裡の人となる。涅槃とは生死を超たる永恆常樂の境界にして極樂とも云ふ。即ち常住安樂自在清淨の靈界にして諸の聖者の心靈の安住する處實には客觀界に認識すべき處にあらずして主觀界に實觀すべき直觀の靈界である。此靈界に種々無量の莊嚴何とも云べからざる至善至妙の境界が在る。

實を尅して論すれば人の精神の最奥底を開きて圓滿に靈的に完成したる人の精神世界である。此光明主義の理想とする處の心的成就の極到である。

既に精神が宗教に依つて一轉し來れば此れ靈に生れ更りしなり然れども此肉體の有らん限りは自然の生理あり制裁を免れず飢寒困苦なきにあらず。

彌々此依身の報命盡きて分解するに及んでは心靈は曾つて理想的に安住したる靈界が實現し來る永恆常樂の寂光土が現はれ來る諸の聖者諸佛の常住に住し玉ふ理想の妙境界即ち常樂我淨の園に眞善微妙の花咲匂ふ所生死諸の苦惱脱して自然微妙の樂土の故に極樂といひまた無量光明土とも智恵土とも常寂光とも種々の麗はしき名を以て表せらるる處、是光明主義の最終の目的と爲る處である。

無住處涅槃とは、生死に任せず涅槃に住せず永恆常住に一方には涅槃界に安住してまた一面には生死界に分身應化して衆生濟度の事業未だ曾て暫くも懈廢し玉はざるなり故に無住處涅槃と云ふ。

大光明中の生活

宇宙全體悉く如來大光明中ならざるはなく其の大光明中に在つて其の中に自ら二面ある。宇宙は一面よりは自然界、他面は心靈

界前者を娑婆といひ後者を淨土と名づく。娑婆本より大光明中である。具存とは娑婆にも淨土にも如來の心身充滿せぬ處なし光明照らさぬ處なく如來を離れて娑婆の實體はない。然して衆生を本來如來の子である故佛性具つて居る。而して本願の光明に攝取せられ同化せらるる時は身は娑婆に在つて神は光明の生活である。然れ共身は自然に縛せられて娑婆に在るも理想だけは光明中の入、淨土にすみあそぶ想あり。然して後命終る時は今まで理想に觀じて居つた光明界が今度は實現となるのである。

であるから形から見れば娑婆と淨土と異れども精神から見れば何れも同じ如來光明中である。大光明中に在り乍ら肉眼は娑婆を見て居る。宇宙同一の如來中に娑婆と淨土の實體にかはりはないのである。それは法界の眞實義なのである。

善導大師、元祖大師にもそれは確かに現れて居つたのである。けれども衆生が分からぬ故に方便して宇宙が全く二つあるやうに教へたのである。

此土入聖はわけが異がう。一切處如來の光明中であるから現在から光明中の生活になるのが圓具教である。さればとて全く無比莊嚴の淨土無しと云ふのではない全くあれども十方に徧在して如來心と相應すれば經驗が出来るので、實驗できぬとも大光明中の生活とはなられる。

次に眞宗は信心歡喜乃至一念至心廻向即得往生住不退轉と眞宗
 でいふ。信心獲れば此身此のまゝ即得往生これ矢張圓具教の一分
 である死なねば往生出来ぬと云ふのは超然主義である。

また圓具教には精神には現在ながら光明生活で眞實莊嚴の淨土
 往生は身の死後である。

昭和八年七月二十五日 印刷
 昭和八年七月二十八日 發行
 編輯兼 山崎 辨成
 發行人 小石川區關口町六十五番地
 印刷人 小林七太郎
 印刷所 小石川區關口町六十五番地
 印刷所 靜文社印刷所
 電話牛込五四一九番
 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 振替口座東京六六八五一番